

白い汗が絞られた布から滴る。

俺の傍で、性慾的の事を話しながらやるので、俺は好危心を挑發されてみてゐたのだ。

其の中にあたくがいめしが出来たとか言つて、豆腐のお茶で持つて來た。

俺は二三杯搔き込んでから、五十錢札を一枚出した。

そんなものは要りませんと言つてとらないので、之から三里行けば御殿場だと云ふので、そんなら俺は此の火箸を買つて行くと云ふて、眞鍮の長さ二尺二三寸の大きい火箸があつたので、それをオーバーの袖のボタンに掛けて、ガチャリガチャリとぶら下げながら出掛けた。

夜明け前とは違つて、兩側の家も、邊りの風物もハツキリ見えた。

腰を下ろして引き返した所も行き過ぎた、ドンドン歩るいた。

少し宛坂になつてゐる。

廣い畑の黒土が、片側丈盛り上つてゐる。

後から一人、晝提灯を提げた尻端折の男が、頬かむりをして追いて來つゝあつた。

俺は足をゆるめて、二三間の後ろまで其の男が來た時、願り返つて立ち止つた。